

## 【論文】

# 日本語教育初級教科書提示語彙の 数量的考察

今西 利之・神崎道太郎

## 要 旨

8冊の日本語教育初級教科書に提示されている語彙の数量的な分析を、特に教科書間に見られる提示語彙の異同の観点から行うとともに、日本語教育の現場において、その数値が意味するところについて考察を行った。その結果、1冊の教科書に提示されている語のうち、他の7冊の教科書と共通している語は2割から3割程度であること、逆に1割程度の語はその教科書にしか提示されていない語であること、日本語能力試験出題基準4級語彙表の語についても、提示するかどうかに教科書間でばらつきがあること、従って、教科書間での収録語彙に大きなばらつきがあることがわかった。この結果を踏まえ、初級語彙の再検討、全体像の把握、学習者や教授者へのわかりやすい形での提示の必要性について述べた。

## 1. はじめに

神崎・今西（2007）では、日本語教育におけるこれまでの基本語彙選定の流れとその問題点を概観しつつ、日本語の学習経験のない学習者を対象とした、いわゆる初級レベルの教科書3冊に収録されている学習語彙を比較・対照し、既存の基本語彙や日本語能力試験出題基準との関連をふまえながら、その異同についての分析を行った。さらに、教科書間に見られる収録語彙の異同が教育現場にもたらす影響と、それに対する教育現場での対応策について述べた。

日本語教育基本語彙に関する大規模な調査・研究は、管見の限りでは、国立国語研究所（1982）や国立国語研究所（1884）が最新のものである。これらの調査・研究から既に20年以上が経過しており、その間の日本語語彙体系の種々の変化や日本語学習目的の多様化を踏まえた新しい教科書が次々と開発、出版されている。また、1994年に公開され、2002年に若干の改訂が行われた日本語能力試験出題基準の4級及び3級語彙表は、11冊の教科書を調査対象として作成されたものであるが、具体的な教科書名や11冊の教科書に提

示している語彙全体がわかる資料は公開されていない。

神崎・今西（2007）で行った初級教科書提示語彙の比較・対照は、3冊の教科書の語彙索引に提示されている語彙に限ったものであった。そこで、新たに5冊の教科書を加えた合計8冊の教科書を対象とし、再度数量的な比較・対照を行い、さらに精度を上げるとともに、限られた冊数から見えなかった部分があったのか、あるいは同質の問題・課題があるのかを分析、確認するとともにより汎用性を高めることにした。本稿は、その結果をまとめ、分析したものである。

## 2. 初級レベルの教科書に提示されている語彙の異同

神崎・今西（2007）では、次の3冊の初級レベルの教科書を対象とし、その提示語彙の数量的な観点からの比較・対照を行った。

- ・『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ本冊』（スリーエーネットワーク、1998年）[以下『みんな』]
- ・筑波ランゲージグループ『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME 1・2・3 NOTES, DRILLS』（凡人社、1992年）[以下『S F J』]
- ・東京外国語大学付属日本語学校編著『初級日本語』[以下『初級』]（三省堂、1990年）

本稿では、上記3冊の教科書について作成したデータの不備を修正するとともに、次の5冊の初級レベルの教科書を加えて、再度提示語彙の数量的な観点からの比較・対照を行う。

- ・文化外国語専門学校編『新文化初級日本語Ⅰ』（文化外国語専門学校、2000年）『新文化初級日本語Ⅱ』（文化外国語専門学校、2001年）[以下『新文化』]
- ・坂野永理他『げんきⅠ・Ⅱ』（Japan Times、1999年）[以下『げんき』]
- ・国際交流基金日本語国際センター『日本語初歩』（凡人社、1981年）[以下『初歩』]
- ・東京工業大学留学生センター監修『Basic Japanese for Students はかせ』（スリーエーネットワーク、2002年）[以下『はかせ』]

- ・岡本輝彦他『語学留学生のための日本語 I・II』（凡人社、2002年）[以下『語学』]

新たに加えた教科書は、日本語関係の教科書を取り扱っているある出版社の売り上げデータを参考として選定した。語彙の選定基準は神崎・今西（2007）を踏襲している。語彙の収集は、各教科書の語彙索引等を使用して行ったが、どのような基準で語彙索引等に載せるのかは教科書ごとに異っている。例えば、教科書内で参考として提示されている語を語彙索引等に載せているものとそうではないものがある。このため、本稿で使用しているデータが十分なものであるとは言えないことをお断りするとともに、データの精密化は今後の課題をさせていただき上で考察を進めることをご了承いただきたい。

リストアップした語の総数（異なり語数）と、それぞれの教科書ごとの語数は【表1】の通りである。

【表1】語数

総数	3713語
みんな	1642語
SFJ	1394語
初級	1655語
新文化	1601語
げんき	1459語
初歩	1258語
はかせ	1016語
語学	1526語

教科書間の提示語彙の異同は一つの語がこれら8冊の教科書のなかで何冊の教科書に学習項目として提示されているのかをみてみることによってわかる。その結果は【表2】の通りである。

【表2】掲載教科書数と語数

教科書数	語数 (%)	
	語数 (%)	累積 (%)
8	355語 (約9.6%)	355語 (約9.6%)
7	236語 (約6.4%)	593語 (約16.0%)
6	208語 (約5.6%)	801語 (約21.6%)
5	222語 (約6.0%)	1023語 (約27.6%)
4	266語 (約7.2%)	1289語 (約34.7%)
3	326語 (約8.8%)	1615語 (約43.5%)
2	547語 (約14.7%)	2162語 (約58.2%)
1	1551語 (約41.8%)	3713語 (100.0%)

このデータから、8冊の教科書に学習項目として提示されている語彙のうち、すべての教科書に提示されている語の割合は約9.6%であり、1割に満たないことがわかる。一方、4割以上の語が他の教科書と共通性を持っていないことがわかる。

次に、教科書ごとに他の教科書との提示語彙の異同を見ると、【表3】のようになった。

【表3】教科書間の語彙の異同

収録教科書数		8	7	6	5	4	3	2	1
みんな	語数	355	237	196	192	195	170	176	121
	%	21.6	14.4	11.9	11.7	11.9	10.4	10.7	7.4
	累積	355	592	788	980	1175	1345	1521	1642
	%	21.6	36.1	48.0	59.7	71.6	81.9	92.6	100.0
SFJ	語数	355	208	140	125	124	108	127	207
	%	25.5	14.9	10.0	9.0	8.9	7.7	9.1	14.8
	累積	355	563	703	828	952	1060	1187	1394
	%	25.5	40.4	50.4	59.4	68.3	76.0	85.2	100.0
初級	語数	355	226	181	159	165	147	178	244
	%	21.5	13.7	10.9	9.6	10.0	8.9	10.8	14.7
	累積	355	581	762	921	1086	1233	1411	1655
	%	21.5	35.1	46.0	55.6	65.6	74.5	85.3	100.0
新文化	語数	355	199	143	136	148	137	168	315
	%	22.2	12.4	8.9	8.5	9.2	8.6	10.5	19.7
	累積	355	554	697	833	981	1118	1286	1601
	%	22.2	34.6	43.5	52.0	61.3	69.8	80.3	100.0

日本語教育初級教科書提示語彙の数量的考察

げんき	語数	355	218	153	129	114	120	134	236
	%	24.3	14.9	10.5	8.8	7.8	8.2	9.2	16.2
	累積	355	573	726	855	969	1089	1223	1459
	%	24.3	39.3	49.8	58.6	66.4	74.6	83.8	100.0
初歩	語数	355	211	147	121	100	89	97	138
	%	28.2	16.8	11.7	9.6	7.9	7.1	7.7	11.0
	累積	355	566	713	834	934	1023	1120	1258
	%	28.2	45.0	56.7	66.3	74.2	81.3	89.0	100.0
はかせ	語数	355	140	103	84	68	77	78	111
	%	34.9	13.8	10.1	8.3	6.7	7.6	7.7	10.9
	累積	355	495	598	682	750	827	905	1016
	%	34.9	48.7	58.9	67.1	73.8	81.4	89.1	100.0
語学	語数	355	227	185	164	150	130	136	179
	%	23.3	14.9	12.1	10.7	9.8	8.5	8.9	11.7
	累積	355	582	767	931	1081	1211	1347	1526
	%	23.3	38.1	50.3	61.0	70.8	79.4	88.3	100.0

このデータから、1冊の教科書に提示されている語彙の約2割から3割程度は他のすべての教科書でも提示されていること、一方で、1割から2割程度の語彙はその教科書にしか提示されていないものであるということがわかる。

では、8冊の教科書すべてに重なりを持つ語彙は具体的にどのようなものなのだろうか。次の【表4】は国立国語研究所（2004）の分類項目に沿って8冊の教科書すべてに重なりを持つ語彙を示したものである。

【表4】すべての教科書に提示されている語

分類番号	語彙	分類項目
1010	こそあそ・他	これ、あれ、どちら、なに/なん、この～、その～、あの～、どんな～、どの～、いかが
1030	真偽・是非	ほんとう
1110	累加	それから
1180	理由	どうして
1200	存在	ある、いる
1251	除去	すてる
1332	良不良・適不適	よく、いい、わるい
1340	調和・混乱	きれいな
1346	難易・安危	むずかしい、 <u>きびしい</u> 、あぶない

1503	終了・中止・停止	おわる
1513	固定・傾き・転倒など	おく
1520	進行・過程・経由	まがる
1521	移動・発着	つく
1522	走り・飛び・流れなど	あるく、はしる
1527	往復	くる、いく、かえる
1532	入り・入れ	はいる、いれる
1541	乗り降り・浮き沈み	のる、おりる
1550	合体・出会い・集合など	あつめる
1551	統一・組み合わせ	いっしょに
1553	開閉・封	あける、しめる
1562	突き・押し・引き・すれなど	おす
1571	切断	きる
1600	時間	じかん、かかる、いそぐ、いつも
1611	時機・時刻	いつ
1612	毎日・毎度	まいにち、また
1632	週・週日	にちようび、げつようび、かようび、すいようび、もくようび、きんようび、どようび
1633	日	やすみ、たんじょうび
1635	朝晩	ごぜん、ごご
1641	現在	いま、こんばん、きょう、こんげつ
1642	過去	きのう、おととい、せんしゅう、せんげつ、きょねん
1643	未来	あした、あさって、らいしゅう、らいげつ
1650	順序	つぎ、まず
1660	新旧・遅速	あたらしい、ふるい
1670	時間的前後	もう、はじめて
1671	即時	すぐ
1700	空間・場所	ところ、どこ
1730	方向・方角	こちら
1740	左右・前後・たてよこ	みぎ、ひだり、まえ、うしろ
1741	上下	うえ、した
1742	中・隅・端	なか
1780	ふち・そば・まわり・沿い	となり
1800	形	まっすぐ
1910	多少	ぜんぶ、ちょっと、たくさん、おおい、すこし
1911	長短・高低・深浅・厚薄・遠近	みじかい、ながい



日本語教育初級教科書提示語彙の数量的考察


1912	広狭・大小	ひろい、せまい、おおきい、ちいさい
1913	速度	はやい、おそい、ゆっくり
1915	寒暖	あつい、さむい、あたたかい、すずしい
1920	程度	あまり、いちばん～、とても、たいへん
1960	数記号（一二三）	ふたつ、みっつ、ほん、ひとり、ふたり、いくら
1962	助数接辞	～キロ/キログラム/キロメートル、～ねん、～さい、～しゅうかん、～がつ、～じ、～ふん、～にん、～まい、～さつ、～えん
2010	われ・なれ・かれ	わたし、だれ
2040	男女	おとこ、おんな
2100	家族	かぞく
2110	夫婦	おくさん
2120	親・先祖	ちち、はは、おとうさん、おかあさん
2130	子・子孫	こども、 <u>おこさん</u>
2140	兄弟	きょうだい、あに、あね、おにいさん、おねえさん、おとうと、いもうと
2210	友・なじみ	ともだち
2410	専門的・技術的職業	せんせい、いしゃ
2419	学徒	がくせい、りゅうがくせい
2510	家	うち、 <u>おたく</u>
2530	国	くに、がいく
2600	社会・世界	<u>せかい</u>
2630	社寺・学校	だいかく
2640	事務所・市場・駅など	かいしゃ、ぎんこう、 <u>こうじょう</u> 、えき
2650	店・旅館・病院・劇場など	みせ、レストラン、しょくどう、デパート、 <u>りょかん</u> 、ホテル、びょういん、としょかん
2760	同盟・団体	クラス
3001	感覚	しる、わかる、いたい
3003	飢渴・酔い・疲労・睡眠など	つかれる、ねる
3011	快・喜び	たのしい
3012	恐れ・怒り・悔しさ	<u>ざんねんな</u>
3020	好悪・愛憎	すきな、きらいな
3030	表情・態度	<u>なく</u>
3042	欲望・期待・失望	ほしい、(お)ねがい
3050	学習・習慣・記憶	べんきょう、ならう、おぼえる
3061	思考・意見・疑い	<u>おもう</u>
3065	研究・試験・調査・検査など	<u>しけん</u> 、 <u>さがす</u>
3068	詳細・正確・不思議	おもしろい




3091	見る	見る
3092	見せる	みせる
3093	聞き・味見	きく
3100	言語活動	ことば、いう、 <b>もうす</b>
3102	名	なまえ、よぶ
3113	文字	かんじ
3122	通信	てがみ、でんわ
3123	伝達・報知	ニュース、 <b>れんらく</b>
3130	希望	<b>ぜひ</b>
3131	話・談話	はなす
3132	問答	しゅくだい
3150	読み	よむ
3151	書き	かく
3154	文章	<b>レポート</b>
3160	文献・図書	ほん、ざっし、しんぶん、じしょ
3220	芸術・美術	え、しゃしん
3230	音楽	おんがく、うた、ひく、うたう
3240	演劇・映画	えいが
3310	人生・禍福	<b>うける</b> (試験を)
3320	労働・作業・休暇	はたらく、いそがしい、ひまな
3330	生活・起臥	<b>せいかつ</b> 、おきる
3331	食生活	ばんごはん、 <b>めしあがる</b> 、たべる、のむ
3332	衣生活	きる、はく
3333	住生活	すむ、 <b>とまる</b>
3350	冠婚	けっこん
3371	旅・行楽	りょこう、さんぽ
3374	スポーツ	<b>うんどう</b> 、スポーツ、 <b>スキー</b> 、およぐ
3391	立ち居	すわる
3392	手足の動作	もつ、 <b>ふむ</b>
3393	口・鼻・目の動作	すう
3420	人柄	<b>まじめな</b>
3421	才能	へたな、じょうずな
3430	行為・活動	する
3520	応接・送迎	まつ
3640	教育・養成	おしえる
3680	待遇・礼など	<b>しんせつな</b>
3700	取得	とる
3710	経済・収支	やすい、たかい



日本語教育初級教科書提示語彙の数量的考察

3761	売買	かいもの、かう
3770	授受	あげる、もらう
3780	貸借	かす、かりる、かえす
3830	運輸	はこぶ
3841	染色・洗濯など	あらう
3842	炊事・調理	りょうり
3843	掃除など	そうじ
3851	練り・塗り・撃ち・録音・撮影	とる
3852	扱い・操作・使用	うんてん、つかう
3860	製造・加工・包装	つくる
4010	持ち物・売り物・土産など	おみやげ
4030	荷・包み	にもつ
4040	貨幣・切符・証券	かね/おかね、きっぷ
4210	衣服	きもの
4220	上着・コート	セーター
4230	下着・寝巻き	シャツ
4260	履き物	くつ
4261	雨具・日よけなど	かさ
4300	食料	たべもの
4310	料理	ごはん
4320	米・ぬか・小麦粉など	やさい
4323	魚・肉	さかな、にく
4330	調味料・こうじなど	さとう
4340	菓子	かし/おかし
4350	飲料・たばこ	みず、コーヒー、おちゃ、さけ、  たばこ
4360	薬剤・薬品	くすり
4400	住居	いえ、 
4410	家屋・建物	たてもの
4430	部屋・床・廊下・階段など	へや、きょうしつ、かいたん
4440	屋根・柱・壁・窓・天井など	まど
4460	戸・カーテン・敷物・畳なぞ	ドア
4470	家具	つくえ、いす、ふる
4514	袋・かばんなど	さいふ、かばん
4520	食器・調理器具	さら
4560	楽器・レコードなど	ピアノ
4590	札・帳など	ノート
4600	灯火	でんき

4610	鏡・レンズ・カメラ	めがね、カメラ
4620	電気製品・部品	ラジオ、テレビ
4640	計器	とけい
4650	乗り物（陸上）	くるま、じてんしゃ、バス、ちかてつ
4670	乗り物（空中・宇宙）	ひこうき
5010	光	あかるい
5020	色	しろい、くろい
5030	音	おと、しずかな、にぎやかな
5050	味	おいしい、からい
5153	雨・雪	ふる
5154	天気	てんき
5240	山野	やま
5250	川・湖	かわ
5260	海・島	うみ
5290	景	けしき
5400	植物	き
5410	枝・葉・花・実	はな
5501	哺乳類	いぬ、ねこ
5601	頭・目鼻・顔	あたま、  かお、め、くち
5602	胸・背・腹	おなか
5603	手足・指	て、あし
5710	生理・病気など	ねつ、げんきな
非掲載		ひく [かぜを～]、かける [でんわを～] どのくらい、あとで

この表に示した語が日本語能力試験出題基準の何級にあたるのかを見てみると、 を付した37語が3級、 を付した3語が2級、 を付した1語（スキー）が、スポーツ名であるため語彙表には記載されておらず、また留意事項としても挙げられていない語、残りの314語が4級の語である。

今回収集した語彙の中には日本語能力試験出題基準の4級語彙が705語あった。次の【表5】は、この705語の収録教科書数の分布を示したものである。

【表5】4級語彙の収録教科書語数

収録教科書数	8	7	6	5	4	3	2	1
語数	314	145	86	56	40	39	17	7

日本語教育能力試験出題基準の4級語彙は、語彙表として示されている728語を含む800語および「あいさつ語等表現」のなかの21項目である。感動詞の取り扱いや多義語をどのように取り扱うのか、また、何を語として認定するのかといったことが日本語教育能力試験出題基準と本稿のデータとの間で完全に一致しているわけではないので単純な比較はできないが、このデータから、日本語教育能力試験出題基準の4級語彙のうち8冊すべての教科書で重なりのある語は多く見積もっても4割5分程度にとどまっていることがわかる。ちなみに、日本語教育能力試験出題基準の4級語彙のなかで、1冊の教科書にしか提示されていない7語は次の通りである。

● 1冊の教科書にのみ提示されている4級語彙

グラス、まんねんひつ、やおや、カップ、はれる（腫れる）、  
たて、かてい（家庭）

また、いずれの教科書にも提示されていない4級語彙（本稿の語彙の選定基準を満たすもののみ）が7語あった。以下の通りである。

● いずれの教科書にも提示されてない4級語彙

あめ（飴）、じびき、せびろ、ぬるい、ぶんしょう、ゆうはん、  
ワイシャツ

### 3. 教科書間に見られる語彙の異同が意味すること

本稿で対象とした8冊の教科書の間に見られる提示語彙の異同は以上の通りである。次に、教科書間に見られる語彙の異同がどのような意味を持っているのかについて考えてみよう。

神崎・今西（2007）で、「比較・対照を行った三冊の教科書は初級レベルの日本語教育で主教材として使用されることが多いため、一人の学習者が同時期に二冊以上の教科書を平行して使用することはまれである。また、これら三冊の教科書のうちのどれかを使用して日本語学習を行い、一定の成果が認められる学習者は初級レベルを修了したとの評価を受けることになる。この評価は教師からの評価でもあり学習者自身の評価でもある。その結果、ある一冊の教科書を使用した学習者が後に他の教科書を使用して初級レベルの日本語学習を再び行うということもまれなケースであると考えられる。したがっ

て、一口に初級修了レベルの学習者といっても、ある学習者が教科書を通じて学習した語彙の少なくとも4分の1が、他の教科書を使用した学習者にとって未習である可能性があるということである。」と述べたが、本稿における【表3】教科書間の語彙の異同によって、さらにその事実が明確となった。

さらにこの点について詳しく詳しく分析してみると、まず8冊全てに重なりを持つ語彙は、「はかせ」での34.9%から「初級」での21.5%、「みんな」の21.6%である。

また、他の4冊以上と共通して重なりを持っている語彙は、「初歩」66.3%、「はかせ」67.1%から「みんな」59.7%で、およそ70%~60%である。そして、逆にその教科書にしか出てこない重なりを持たない語彙は、「新文化」19.7%から「みんな」7.4%までの幅を持つ。およそ20%弱~10%前後はその教科書でしか学習することがない。「はかせ」の8冊共通の重なり語彙が34.9%、5冊までの重なりが67.1%、「はかせ」独自の語彙10.9%と比べると、「新文化」の場合、8冊共通の重なり語彙が22.2%、5冊までの重なりが52.0%で「新文化」独自の語彙が19.7%であり、かなり独自性が強いと考えられる。とはいえ、その教科書だけにしか表れない語彙については、ある程度教科書の目的、その導入における場面設定等で当然出てくる数字と考えられる。

むしろ、8冊全ての重なり語彙が34.9%、5冊までの重なり語彙で67.1%を超える「はかせ」の汎用性は高いと見られるであろう。ところが、これは収録語数にも関連する。【表1】からも分かるように、他の教科書に比べ500~600語収録語数が少ない。他の教科書のほぼ3分の2の分量である。収録語数が少ない分、重なり率が多くなっているからである。やはり、汎用性を高くすると収録語彙も絞り込まれ、収録語数が減少していく。

そして、【表4】からも分かるように、統一性をとろうとして共通提示語彙をベースにすると非常に抽象度の高い語彙になってしまう。しかも、絞り込みを行うことで収録語数が減少する。

なお、「初歩」は、総語数1258語（「はかせ」と他の教科書の間）、8冊共通の重なり語彙28.2%、5冊までの重なり語彙で66.3%となり、本稿で対象とした教科書のほぼ半数以上の教科書に提出される語彙が提出され、重なりを持たない語彙が11.0%で1割程度に抑えられていることは、かなり汎用性が高いと言い得るであろう。これは、本稿では、教科書提出語彙の共時的観点の分析であるので本筋からはやや離れることになるが、教科書作成の通

時的な流れが関与しているのではないかと思われる。つまり、「初歩」の出版は、今回対象とした教科書のうち最も古く、そこを起点に日本語教育の現場において、学習者のニーズに応えつつ必要な語彙を付加してきたのではないであろうかと考えられる。時代の流れに対応した語彙選定、あるいは教授法の開発は当然の要素として考慮されるべきであろう。そうすると、汎用性の高い語彙というのは、時の流れに影響を受けていないのかとも考えられるが、しかし翻ってみるならば、現場のあるいは、学習者のニーズには合っていないか、応えにくい状況がそこにあったから種々の改変とともに語彙の削除、加筆訂正も行われたのでないということも同時に考えられる。依然として汎用性の高い語彙も存在する一方、それだけでは応えられない状況もあるということであろう。本稿のデータでも「いずれの教科書にも提示されていない4級語彙」として、「あめ（飴）」、「じびき」、「せびろ」、「ぬるい」、「ぶんしょう」、「ゆうはん」、「ワイシャツ」と7語が表れている。単に使用頻度が下がっている語彙なのかということは、即座には判断しかねるが、再考の必要性があるであろう。

5冊までの重なり語彙率を見れば、「はかせ」67.1%をはじめとして、「初歩」66.3%、「語学」61.0%、「みんな」59.7%、「SFJ」59.4%、「げんき」58.6%、「初級」55.6%、「新文化」52.0%となり、逆に重なりのない独自語彙の率は、「みんな」7.4%、「はかせ」10.9%、「初歩」11.0%、「語学」11.7%、「SFJ」14.8%、「初級」14.7%、「げんき」16.2%、「新文化」19.7%と10%前後～20%弱までになっている。ここから、教科書の汎用性をなんとか保持しつつも、独自の学習者のニーズ、使い良さ等の独自性も加味しようと創意・工夫が試みられていることが分かる。しかし、ここで分かることは、汎用性と独自性の限界点がこの数字ではないだろうか。独自語彙を抑えつつも、重なりの限界点が60%～50%辺りに落ち着かざるを得ないのであろう。教科書作成時にどの程度の汎用性を持たせるかは様々な要素が関わっているわけであるが、今回のデータからはほぼこの数字が示す値辺りが重なり率の限界なのであろう。そうすると、やはり学習者から見れば40%～50%は他の教科書で学習していない語彙ということになり、残りは未習語彙ということになる。その結果、学習者間で学習語彙に食い違いが出てくることになる。この数字を大きいと見るか、小さいと見るかは、目的、使用環境等で意見の分かれるところではあるが、学習者間で差があることは、明白である。特に、初級段階で学習語彙に差があるということは、中級教科書で直接教授法を採用

する限り、未習語彙を未習語彙で説明するという不具合が出てくるリスクを学習者側に負担させるという可能性が大きくなる。

ところで、重なり語彙率が少なくとも、重なり語数が一定の語彙を満たしていれば、重なりのない部分については、その教科書の独自性を持った部分として許容できる。そこで一定の語彙ということが考えられる。

能力試験等の語彙基準であるが、この点を再度検討してみる。これは、前節の国立国語研究所（2004）の分類項目に沿って8冊の教科書すべてに重なりを持つ語彙を示した【表4】と4級語彙の収録教科書語数を示した【表5】である。前節で述べたように語彙認定に関わる問題も含んでいるものの、4級語彙としておよそ728語を含む800語が4級語彙として提示され、能力試験では、それを学習しておかなければ学習者は4級レベルと認定されない。

【表4】と【表5】を見ると、そのうち日本語教育能力試験出題基準の4級語彙のうち8冊すべての教科書で重なりのある語は多く見積もっても4割5分程度にとどまっていることは前節で述べた。

そうすると、重なりの限界点が60%~50%辺りであり、さらにそのうちの50%弱が4級語彙とは接点を持たない語彙を学習者は学習していることになる。このことは、前述した中級以上へと進む学習段階での不具合と標準的な認定を受けられないという二重の点において学習者にリスクを負わせていることになる。あるいは、学習者にとって標準的な日本語を学習しているという点からは信頼性がその教科書から減少する可能性もある。教科書が学習者の学習上の主要な教材である以上、この点は重要な点である。

【表4】によると、37語が3級、3語が2級と、教科書に一般に初級レベルとして扱われる日本語能力試験出題基準の4級語彙も含まれるものの、3級、2級語彙も含まれている。主教材として使用している教科書に提示されていない語彙であっても、副教材の使用、日本語教師自らの判断や学習者からの要望に応ずる形での提示、授業外での日本語使用による自然習得などによって既習語彙必要性から4級外の語彙も出ている。抽象語彙は汎用性が高い、しかしそれで学習者が日本語学習の使用目的が満たされるわけでもなく、しかも学習者の目的は個別的で、その必要性を満たそうとするとどうしても教科書であるいは、補助教材等での使用語彙も、個別・具体的にならざるを得ない。文法項目（文型）が、提出順序の違いや細部での異なりはあるものの、おおよそのところでは共通性が高いことを考えると、語彙に関しての教科書間の異なりはかなり大きなものであるといってもいいのかもしれない。

8冊の教科書を見ても、この状況から、初級段階で使用した教科書が学習者によって異なる中級レベルの授業で、教える側が「これは初級の教科書で習っているはずだ。」というようなことを学習者に対して安易に言うことはできないし、「この語は4級語彙なのに、それを知らないのだから初級修了レベルに達していない。」といった評価を学習者に対して簡単に下すわけにはいかないということは、神崎・今西（2007）で述べたことと同様である。

#### 4. おわりに

日本語教育の現場から見ると、通時的には、その先達が様々な要素を取り入れながらその基盤となる教授法、学習者のニーズ、それを取り巻く環境から日本語教育の体系を作り上げてきたわけである。その結晶の一つとして教科書がある。そして、それを参考にしつつ、その後の変化に合わせ教科書も改変発展してきた。その中で、教科書中の語彙も削除、付加などの修正を加えられてきている。

しかし、語彙に限って述べても、削られた語彙、付加された語彙等その語彙が何であるのかの具体的な部分はやはり深く検討しつつ行われてきたのか不明である。本稿で8冊に教科書数を増加し、分析範囲を拡大してみたのであるが、神崎・今西（2007）で述べたその結論は明確になっていった。

実際の教育現場でも、学習者によっては、学習者本人が目指す能力試験相当の実力を付けるために、ある者は授業で使用した教科書を丁寧に復習し、またある者は能力試験用の模擬テスト、試験用問題集、文法、語彙、漢字等総まとめ集等を使って学習している。教科書のみで能力試験相当の実力を付けるために努力している学習者と能力試験用の教材等で能力試験相当の実力を付けようとする学習者の到達難易の差を感じている現場は多いのではないだろうか。教育現場に携わるものとしては、なんとかこのギャップを埋めたいものである。教授法、学習者のニーズ、それを取り巻く環境との要求と標準的な日本語語彙の提示というある時は矛盾を生じる課題の解決方法を日本語教育に携わるものは、見つけ出さなければならないであろう。

現在考え付く方法としては、まず認定に関わる日本語能力試験の提示語彙の見直しをすることである。しかし、これも標準化という絞り込み作業の限界は当然あるであろう。もう一つは、全体像を別個に見せることであろう。絞り込みに付随する限界がある限り、さらに教科書作成に付随する独自性の保持という点から考えると、少なくとも学習者、教授者が何が教科書に入っ

ていて、何が入っていないかを客観的に認識できる語彙リストのようなものを持っていて、それによって4級であれば4級のレベルに至るには何があるのか、また中級等に進む場合、他の教科書等に移行する際教授上の不具合を起こさないための方策として持つべきであろう。

本稿では次期の段階で、その指針は何であるか、どういった形のものであるのがよいのか等について論を進めることを課題としたい。

ちなみに、8冊全ての重なり語彙の中に、2級語彙である「ビール」、「のど」、「りょう」がある。この理由は、何であるのか、1冊の教科書にのみ提示されている4級語彙とは何を意味するのか、興味のあるところであるが今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 神崎道太郎・今西利之（2007）「日本語教育における初級語彙をめぐって－初級教科書の語彙選定に関する諸問題－」『間谷論集』創刊号（日本語日本文化教育研究会）
- 国際交流基金・財団法人日本国際教育協会（1994）『日本語能力試験出題基準』（凡人社）
- 国立国語研究所（1982）『日本語教育基本語彙七種比較対照表』（大蔵省印刷局）
- 国立国語研究所（1984）『国立国語研究所報告78 日本語教育のための基本語彙調査』（秀英出版）
- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表－増補改訂版』（秀英出版）

※本稿は、2節を今西が、1節、3節、4節を神崎が執筆した。